Let`s begin 防災
～必ず来る災害のために今できること～

日本福祉大学付属高等学校

今年度の研究・活動の動機・目的

昨年度の「高校生防災セミナー」に参加して、多くのことを学ぶ中で、私たちの生活の中で災害は非日常的なことであり、その備えが当事者として不足していることが被害を拡大させる最も大きな原因であると強く感じた。そのため、いつ起こる変わらない災害を恐れるのではなく、災害を意識した準備を、日常のこととして考え、実際に何ができるかを考えたのが、今年度の研究の動機である。

　そして、高校生が災害対応に対する正しい知識と正確な技術力を身につけることができれば災害現場において高い能力が発揮できることを実証したいというのが今年度の研究の目的である。

1，開発研究

防災を意識した生徒会・委員会活動・システム作り

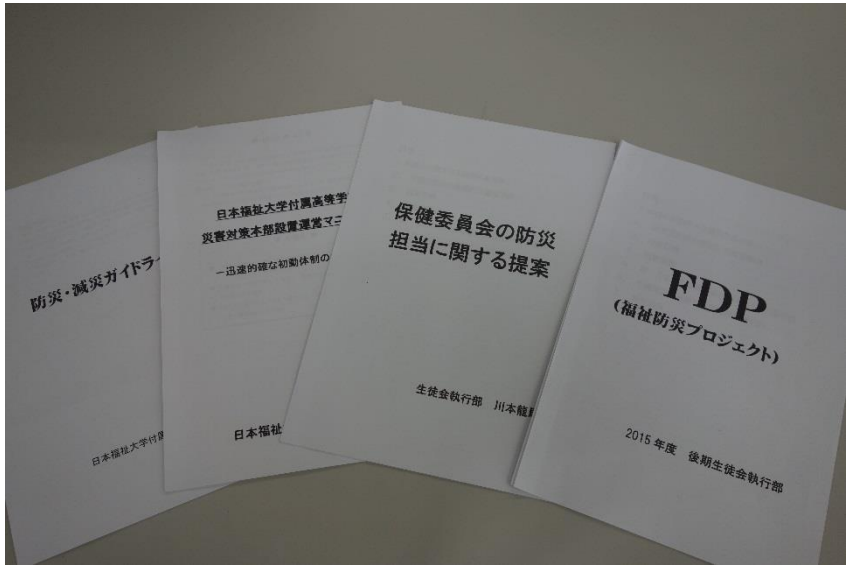
- 研究・活動の方法

  本学園が避難所になったときに、活躍できるよう日頃からその体制を作り準備をしたい！

  ①生徒会の活動方針にも防災活動を追加

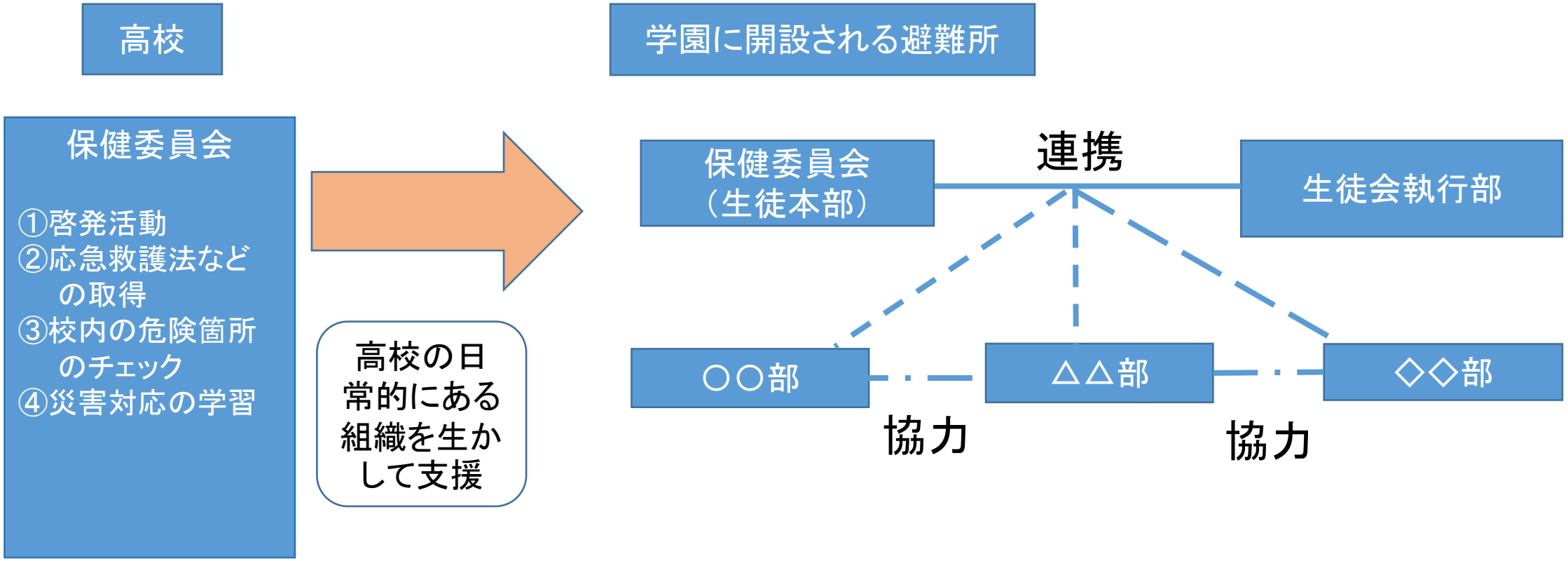
  ②保健委員会の役割に防災の役割を追加

  ③生徒会執行部、保健委員会、部活動の組織を核にした災害対応シュミレーションを作成



＜避難所支援組織体制モデル案＞

災害時の活動内容をあらかじめ明確にすることにより発災直後から災害対応活動を展開することができると考えた
また災害時の対応を考えることで日常から災害対策への意識を持たせることができる



研究・活動の成果

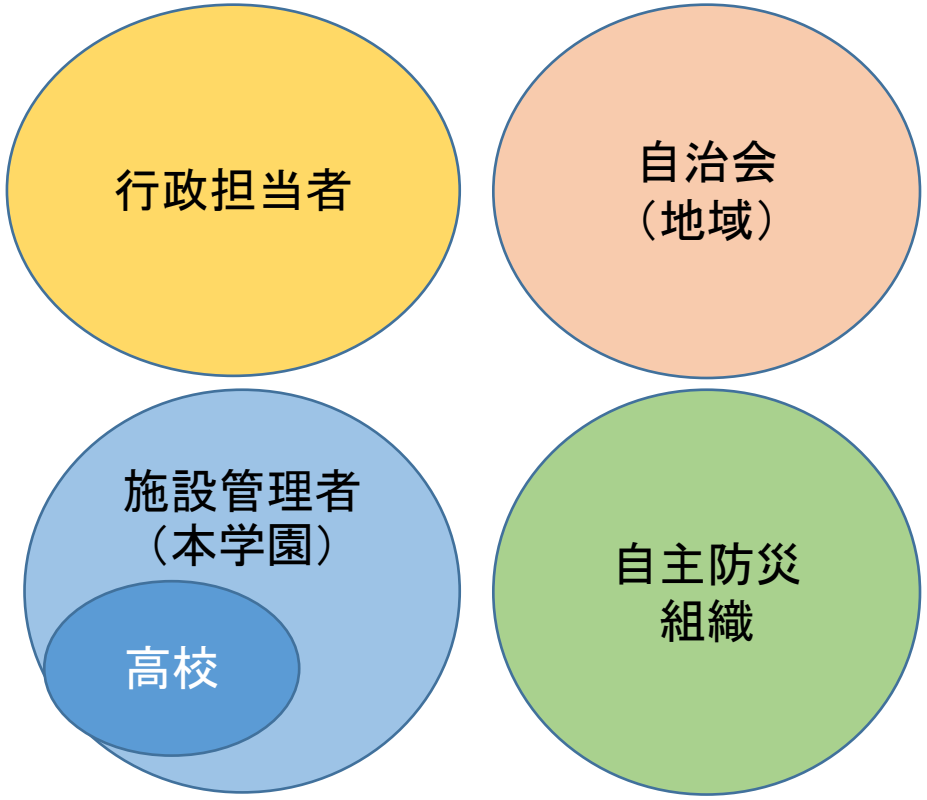
- 未成年という高校生の身分の限界

  → 学校の方針は自宅へ帰す

- 避難所運営には様々な組織が関わり、高校単独で動くことは困難

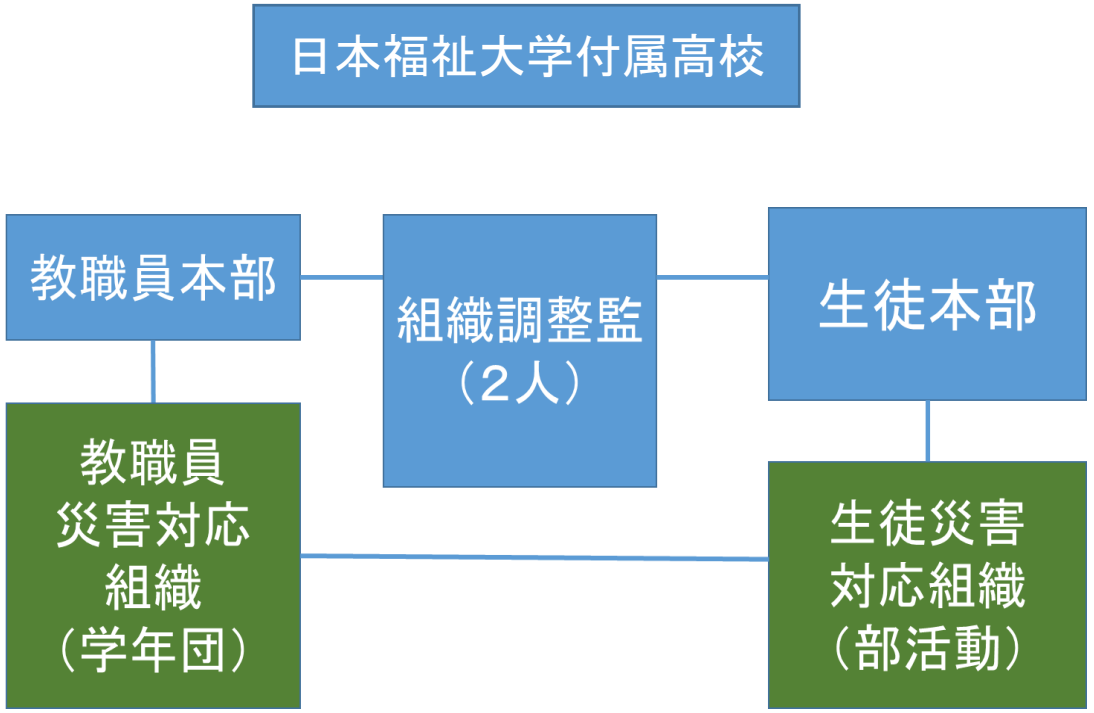
  → そのため高校組織の範囲内にて自分たちを守るための防災組織の検討に変更

＜避難所運営＞



＜帰宅困難時対策組織連携体制案＞

- 教職員本部（付属高校災対本部）
  意思決定・情報収集
- 教職員災害対応組織（学年団）
  BCPに基づく災害対応
- 生徒本部（保健委員会・執行部）
  生徒組織の活動補助
- 生徒災害対応組織（各部活動）
  教職員組織と連携し災害対応の活動補助



この色を変えた組織が県のマニュアルにある組織体制と同じであれば、地域でも活動ができる。

2，調査研究

通学路線無人駅の避難所経路調査

- 研究・活動の方法
  土地勘のない場所であっても安全に最寄りの避難所まで逃げ切ることができるか誘導看板のルートの安全性を検証

①研究対象は通学に利用する区間の無人駅

（名鉄常滑線　神宮前駅　―　太田川駅間、河和線　高横須賀駅　―　河和駅間、
知多新線　上野間駅　―　内海駅間）

②地図を写真に撮り、その表示された通りに歩き、避難ルート、所要時間、避難所の立地場所を調査

調査結果

（調査区間無人駅総数17駅）

駅の立地場所 / 所要時間	市	町
10分以内	6	3
11分～20分以内	3	4
21分以上	0	1

研究・活動の成果

- 簡素的な地図は都会には向くが、田舎には向かない
  （地域格差の問題）

- 案内されている緊急広域避難場所が津波災害に対応した避難所ではないものもある
  （複合災害の問題）

- 案内図に示されている経路が災害時に使用することができなくなる可能性の高い危険な道路を表示しているものもある

- その駅の場所の近くに避難できる場所があるにも関わらず、徒歩20分以上かかる標高の低い所に案内しているものもある

場所によってはかえって危険にさらされる場所もある。しかしその情報を知っていれば、他の乗客にも案内をすることができる。

３，フォローアップ

まずは名鉄に調査結果を報告しました

- 調査によってわいた疑問点については、

  名鉄に「緊急広域避難場所」の地図について、いくつか質問を行い、回答をいただいた

- その後、調査結果の報告に対しては、

「避難場所の指定については、自治体との協議をして決定したものであるため、自治体から要望があれば検討する」という回答

そこで、美浜町に要望書を提出しました！

- 今回の調査で私たちが問題と感じたのは、美浜町内にある2駅。いずれも避難ルートに問題ありと調査結果を報告

- 山田防災官からは、「来年度避難所の変更とともに、名鉄に協議を申し入れる」と力強いお言葉をいただいた

防災ボランティアコーディネーター養成講座（フォローアップ講座）に参加

＜フォローアップ講座のねらい＞

- ボランティアセンターの運営の基本を理解する

- 各地域のボランティアセンターの運営のみならず、他地域のボランティアセンターの運営に協力することができる人材の育成

恐れずに言えば･･･課題は多い！

- 課題１：高い年齢層
  参加者の8割はシニアボランティアで、若い人がいない

- 課題２：運営マニュアルの基本の標準化
  「うちの地域では、」という言葉が飛び交い、議論が先に進まない
  各地域で行われている講座や、研修がバラバラなのが原因

  けれどもここでやられている内容は、被害者にも支援者にもなる可能性のある私たちは知っておいたほうがいい内容

そこで、提案です

- ぜひ各地域で開催されている防災ボランティアコーディネーターの養成講座に参加をしませんか？

- 内容は、私たち高校生でも十分できる内容。内容を理解していると、いざというときに高校生でも活動できます

- 高齢者との相性も、孫世代ということで、相性バッチリ！議論の潤滑油になります!!

４，考察結果と今後の課題

大切なことは、「つなげる」こと

- 人、空間、時間のつながりを意識した日常の防災対策を実施すれば、非常時には大きな力を発揮する

「共助」につながる「自助」力の育成に学校で取り組めば、高校生にもできることはたくさんある！

しかし、高校生にとって“地域”とはどこ？

- 移動する生徒・学生の力を活用した新しい地域コミュニティの創造

既存の地域のコミュニティに、移動する生徒・学生をどのようにつなげると効果的・持続的な「共助」組織になるのか

これが、私たちの考えた、必ず来る
災害のために今できることです。